



事例紹介

**タビカレ学園祭で1位獲得！
喜多方市の「漢字のまち」とは**

喜多方ラーメンで知られ、美しい蔵が建ち並ぶ喜多方市。レトロな雰囲気漂うまちを散策すると不思議な漢字の看板が目につきます。その数は180を越え、まだまだ増える予定とか。この不思議な漢字は古代文字。それをテーマにした「漢字のまち」の取り組みが、観光庁主催のイベント「タビカレ学園祭」で来場者による投票の結果総合第1位を獲得しました。

古代文字は漢字の源である3000年以上前の象形である甲骨文字。周時代の文字を元にデフォルメされた書体でもユニークです。漢字の部首となった文字と、部首以外となった文字、さらにその組み合わせによる古代文字の謎解きは興味深く、大いに知的好奇心を刺激します。タビカレ学園祭の会

福島県喜多方市

蔵とラーメンに続く 新たな観光資源は 3000年前の文字！

場では自分の名前を古代文字で書いてもらい、そこに込められた意味の説明が受けられるブースが出され、長蛇の列ができました。

この試みについて喜多方市観光交流課の栗城茂光さんは「蔵と喜多方ラーメンに次ぐ新しい観光資源を探していました。そんな時、市内在住の楽家・高橋政巳さんを中心とした古代文字に親しむ『喜多方を漢字のまちにする会』の取り組みが目にとまったので」と経緯を説明します。もともとは個人的なつながりから始まった看板設置が徐々に広がり、漢字マップを作成するまでになり、第一回創作漢字コン



楽家高橋さん。市内に店舗兼工房があり、訪れた人の名前を古代文字で書いてくれることも。

テストを開催するなど、少しずつ輪を広げていきました。

**漢字を楽しく
学べる旅として
修学旅行や外国人に
アピール**

そんな「漢字のまち」づくりは、転機が訪れたのは平成23年3月。東日本大震災と福島原発事故の風評被害によつて同市の観光産業は大打撃を受けました。翌々年には一般客は震災前の8割まで戻ったものの、修学旅行などの教育観光は激減したまま。そこで、観光庁の「官民協働した魅力ある観光地の再建・強化事業」に申請し、採択されました。「和歌山大学の大澤健教授や旅行代理店のコンサルタントなど、外部の方の協力のもと喜多方の魅力を目利きしてもらい、改めてその価値を認識す



ることができました。古代文字もその一つでした（栗城さん）。

その取り組みのなかで、古代文字看板の増設や漢字ガイドの育成を行い、「古代文字ミステリーウォーク」などの旅行商品を開発。平成25年8月と10月にモニターツアーとして開催し、その盛り上がり

古代文字の看板は店先に飾られていたり、またお店の看板そのものとしても浸透。文字はお店や店主の名前から1字を取ったり、商売に関連する文字、店主の理念などを表した文字などさまざま。店名や商売とまったく関連ない文字の場合、読み解くのはさらに困難



観光立国 **日本** 実現に向けてさらに加速!



を受けて、平成26年からは4月から11月にかけて通年の観光コースとして販売することになりました。

「楽しみながら漢字に親しみ、まちの人たちと交流する。そんなツアーを県内外の多くの人に体験してもらいたいですね。そして、修学旅行や漢字圏の外国人旅行者などの誘致にもつなげていきたいと思えます」(栗城さん)。

アイディアを出し、実行し、より魅力的な喜多方の旅を演出

実際にミステリーウォークのルートを歩いてみると、車からは見えなかった素顔のまちが見えてきます。お店の皆さんの誰もが店先に掲げた古代文字について詳細に語れるのに、はびつくり。元来恥ずかしがり屋が多いという喜多方の人で



モニターツアーとして開催された「ミステリーウォーク」。看板に書かれた古代文字を読み解きながら喜多方のまちを歩いていく。

も、古代文字が旅人との会話のきっかけとなっているようです。

「お店の旦那さんや女将さんが積極的に古代文字の意味を説明してくれるので、交流が生まれるようになりました。喜多方の魅力は、蔵のようにたくさんさんの「モノ」が詰まっております。奥深く知るほど多くの発見があります。長く滞在していただくためにいろんなアイディアを試しているんです。例えば、夜のまちの古代文字看板設置店(飲食店)を巡る『夜のナイトウォーク』なんて大人が楽しめるのでしょ」

そう活き活きと語るのには「喜多方を漢字のまちにする会」副会長であり、第1号看板を掲げた「あづま旅館」女将の齋藤百合子さん。柔らかな響きの会津弁に心が温まります。「喜多方の人は控えめだけど、口に出すと実行する有言実行タイプ。会を中心にいる人を巻き込んで、活動を育てていきたいですね」

今後は取り組みの自立化を目指して、ミステリーウォークと絡めた創作漢字切手の発行や、福島県やJRなど



「喜多方を漢字のまちにする会」副会長・あづま旅館の女将 齋藤さん。あづま旅館の看板はもちろん古代文字。旅館だけに漢字は……



蔵は店舗としても活用されている。写真の蔵は八百屋さん。看板ももちろん古代文字



の取り組みと連携させたキャンペーンなども行います。

**老いも若きも楽しむ
長く愛される観光資源として**

まちの人々の小さな活動が市全体の観光資源となり、さまざまなものと連携しながら、さざ波のように広がっていく。その起点となった高橋さんは「大好きな漢字をたくさんの方に知ってもらえて、こんなにうれしいことはないですね」と目を細めます。

「でも、漢字はみんなのもの。媒介として動き始めたと思っています。日本や世界の人に喜多方のまちで言葉の豊かさに触れて欲しい。そのためにも協力は惜しまないつもりです」

施策紹介

「タビカレ」とは?

観光庁の「官民協働した魅力ある観光地の再建・強化事業」の通称であり、日本全国を旅の魅力学ぶ大学『日本タビカレッジ』に見立て、全国78地域の魅力開発と旅行商品化の取組を応援することを目的とした事業のこと。観光地や旅行会社、そして旅を愛する一般の人々が、78の観光地を対象に知恵や意見を出し合い、新しい国内旅行の魅力を遊びながら学ぶことができます。

平成26年2月にイベント「タビカレ学園祭」を開催しました。

漢字が書かれた看板だけでは人は呼べない。まちの人々が自分の言葉で語れるようになってこそ、真の「漢字のまち」になれると言います。タビカレ1位の評価を受け、地元でも関心が高まるなか、高橋さんを講師に勉強会を行ったたり、小学生も参加できる、空いている蔵で漢字とともに蔵の文化や歴史を学ぶ「古代文字ワークショップ」を行ったたり、ソフト面での充実も図っています。

史跡や大きな箱物がなくとも、地元の人自身が楽しみ、楽しませようという心が形になっていく。そんな喜多方の取り組みは、日本の観光の新しい形の一つと言えるのかもしれない。